『未来をみつめる／命を守る農場』における学び

—埼玉県小川町霜里農場の研修を事例として—

稲泉博己[1]*・沖小百合[2]・下口ニナ[1]・安江紘幸[3]・大室健治[4]

1．は　じ　め　に

現場における体験や実習を通じた学びについては，以前から高い効果が認められており，近年では学齢期の児童・生徒の体験型研修に注目が集まっている（註1）．一方農業の分野でも，体験を通じた学び，研修の重要性が指摘され，古くから「農民教育の三本柱」の重要な要素とされてきた（註2）．しかしながらこれまでは，「農民『教育』の三本柱」と言われてきたように，ともすると学校などの教育機関での指導方法の一環として捉えられがちであった．

そこで本研究では，教育機関を離れた農業現場での「学び」，あるいは「正統的周辺参加」論（註3）における熟練者（篤農家）と新参者（新規就農者）の「学び合い」の実態を取り上げてみたい．具体的には，埼玉県小川町において霜里農場を主宰し，有機農業を実践する金子美登氏に焦点を当てる．すでに，金子氏自身の取組みについては多くの報告がなされているが（註 4），特に本研究は，金子氏が小川町に居住する青年農業者に対して，どのように金子氏の技術や理念を伝えているか，その継承方法に着目するものである．

2．調査研究の内容と方法

1）調査研究の内容

本研究では，霜里農場（金子氏の農業経営）で研修を受けている青年農業者（以下，霜里青年）を中心にして，金子氏が自身の経験の蓄積によって構築した技術や理念を霜里青年へどのように伝えているか，次の２点を中心に検討する．

第１に，霜里青年を対象にして，霜里農場での研修を選択したルートを把握するとともに，金子氏との最初の接点や研修前の期待等を把握する．

第２に，霜里農場へ研修開始後，霜里青年が金子氏とどのように接点を持つことで，いかなる影響を受けているかを，ライフストーリー・インタービューによって明らかにする．ここが，いわば本研究の中核となる金子氏による研修生に与える直接的な影響の部分である．

2）調査研究の方法

まず，金子氏自身のライフストーリーは，霜里農場のみならず小川町の風土史となっていることが予想されるため，金子氏のライフストーリーを既往文献と本人への聞取り調査を踏まえて整理する．また，2009 年に金子夫妻の結婚 30 周年をお祝いして，かつての研修生 90 名が寄稿して編んだ私的な文集「一粒万倍」を用いて，研修修了生の概要を把握する（註 5）．この「一粒万倍」の主な内容は，①研修生のプロフィール（農業者・農業経験

[1] 東京農業大学
[2] 東京農業大学大学院
[3] 東北農業研究センター
[4] 中央農業総合研究センター
Corresponding author*：inaizumi@nodai.ac.jp

（註1）鈴村源太郎（2014），藤田康樹（1997，2011），塩見定美（2000）など．
（註2）「農民教育の三本柱」とは，昭和初期の農村更生運動の中で，農学校の教育方法に対して，加藤寛治らのいわゆる農民道場で採用された徹底した研修方法のエッセンスを指している．具体的には『実践教育』,『師弟同行』,『全寮制』を表す．稲泉博己（2006）などに詳しい．
（註3）レイヴ，ウェンガー（1993）．
（註 4）内山政照・金子美登他（1980），金子美登（1986，1992，1998，2011）．
（註 5）今回は，本研究の目的遂行のために金子氏ご本人より特別に閲覧を許諾された．

の有無，年齢，学歴・前職，研修年次など)，②霜里農場研修に入ったきっかけ，③（農業従事者に対して）現在の農業経営概要，（新規就農者に対して）就農時の苦労，④霜里農場研修時の思い出，さらに⑤結婚 30 周年のお祝いメッセージ等である．さらに，特定の霜里青年に対して，これまでに，いかなるイベントを通して金子氏の技術と理念に触れ，そこでどのような影響を受けてきたかを，彼らのライフストーリーに則った聞取り調査により把握する．調査は 2013 年 12 月に行い，計 3 名の研修生に対して各々2 時間程度のインタービューを実施した．そこでの具体的な調査項目は，技術面では，金子氏から教わった有機農法に関するものであり，また理念については，金子氏から教わった農業・農村観に関するものを中心に据えた．

３．調査結果

１）金子美登氏の略歴

金子美登氏は，1968 年，法整備が間に合わず『農業者大学校』を名乗れなかった農林省中央青年研修施設に入学し，その後 1971 年に晴れて農業者大学校の第 1 期生として卒業した．農業者大学校時代の久宗高校長や，ハワードの「農業聖典」ゼミを担当された内山政照氏，さらに同校の範囲を超えて日本の有機農業の父とされる一楽照雄氏，酪農学園の黒沢西蔵氏などから多大な影響を受けて，卒業後，埼玉県小川町下里地区において有機農法を導入した．これが現在の霜里農場の淵源といえる．その後，有機農法を実践しつつ 1975 年には早くも消費者との提携を始め，1977 年には独自の「お礼制」という農産物の取引方法を編み出した．他方，社会的な活動としても，日本有機農業研究会の発足に関わり，有機農業者のみならず，有吉佐和子をはじめとする作家や文化人とのネットワークを広げた．そうした縁から 1979 年にアナウンサーとして活躍していた友子夫人と結婚，同時に研修生の受け入れを始め，1982 年には有機農業の根幹である種苗の確保のために，種苗交換会を開始している．

一方，長い間，地元の小川町では慣行農法（金子氏に言わせれば『近代化農法』）が主流であった．したがって，金子氏の有機農業の取り組みは，孤独との戦いであったとも言える．しかし早くから始めた研修生の受け入れが，金子氏の家族のみならず，下里地区，小川町にも影響を及ぼすことになった．

最も大きな画期となったのは，1987 年，集落における農薬の空中散布が中止されたことであった．この当時のことを実質的な集落のリーダーだった機械化利用組合の安藤氏は「俺たちがこれまでのやり方を続けても，ちっとも楽しくないし，若い奴らもいない．それなのに美登君のところにはいつでも大勢の仲間がいて，楽しそうだったし，何より生産物の質が良かった」と述懐している（註 6）．このような地域全体の方針転換が追い風となり，1988 年には地元の酒造会社と有機米を使った『小川の自然酒』，あるいは『石臼挽き地粉麺』など新たな製品を開発・販売を開始した．1999 年には小川町議会議員に選出され，また 2009 年には埼玉県内のリフォームメーカーOKUTA との接点を持ち，同社の社員の給与の一部を小川の有機米で現物支給するため，集落のコメを一括現金で買取ってもらう『こめまめプロジェクト』の展開を始めた．以上のように，金子氏が牽引役となり集落全体が有機の里として転換していったプロセスが注目され，2010 年には天皇杯（村づくり部門）が授与されるに至っている．

２）霜里農場における研修

1979 年以来 30 年以上継続して，有機農業の研修希望者を受け入れている．研修生になるためには，基本的に金子氏・友子夫人の面接に合格する必要があるが，1 日体験を通した既存の研修生との相性なども判断材料となる．期間は短期長期とまちまちだが，これまでに国内外の研修生を 100 名以上受け入れている．

研修内容は，特別な研修プログラムを組むというよりも，その時々の作業に従事する，いわゆる農場実習，あるいはデューイの「なすことによって学ぶ（learning by doing）」方式を採用している．

農業研修以外では，２か月に一度，一般の希望者を対象とした金子氏ともう一人別の講師を迎えた講義と，農場見学を併せた「農場見学会」を開催している．参加費は一人当たり 2,500 円，毎回約 70 人以上が参加している．

３）「一粒万倍」の回答者属性

「一粒万倍」に掲載されている 90 名の研修修了生の内訳は，男性 62 名，女性 28 名，現在農業に従事している

（註 6） PARC（2012）収録のインタービューより．

者 46 名（男 37 名，女 9 名），その他の仕事に就いている者 44 名（男 25 名，女 19 名）であった．年齢は，全体平均が 41.1 歳（「一粒万倍」発行 2009 年現在，以下同），研修時年齢の全体平均は 30.5 歳であった．これを男女別でみると，農業従事者の研修時年齢は 32.3 歳（男 33 歳，女 29.8 歳），他の職業従事者の研修時年齢は 27.4 歳（男 28.3 歳，女 26 歳）であり，現在農業を営んでいる者の方が男女とも年齢が高く，30 歳前後での研修入りが多かったものと見られる．金子氏によると，30 歳前後の研修希望者は問題意識が明確で学ぶ意欲が高いと言う．

4）研修後の営農の概況

「一粒万倍」掲載の研修生の中で，現在就農している 46 名の内，専業経営（27 名）は概ね 1 ha の農地を利用しており，兼業経営（11 名）は 80a であった（表 1 の中央値）．専業・兼業のいずれにも他の集団からは特異とみなせる大規模経営が存在しているため，中央値と平均値には乖離がみられる．個々の作目については，いずれも「本家」霜里農場を手本にしており，多岐にわたるため，ここでは詳細なデータは割愛するが，多くの経営が水田と畑作の複合経営であり，野菜を作っている場合は年間を通した 50 品目以上の季節の野菜を作付けている．

表 1　霜里農場研修生の専業・兼業別の農地面積　(a)

	専業			兼業		
	N	中央値	平均	N	中央値	平均
田面積	14	53.5	95.2	5	38.0	61.6
畑面積	18	55.0	52.7	9	75.0	81.7
野菜面積	6	70.0	130.8	0	－	－
土地面積合計	27	100.0	166.5	11	80.0	299.4

注）－は該当なし。

5）霜里農場研修修了生へのインタービュー結果

上記「一粒万倍」から得られた情報をもとに，①小川町在住，②農業従事者をピックアップし，金子氏のアドバイスも受けながら，いずれも非農家出身のインタービュー相手を選定した．インタービュー結果の概要をまとめたものが表 2 である．

表2　研修生インタービューの概要

氏名	研修開始年次（年齢）	現在農場名	研修方法・内容	研修終了後・就農前後	将来ヴィジョン
T氏男	1983（23）	Kファーム	牛の糞出し、除草、管理から野菜収穫、調整他全般を、金子さんとずっと一緒にやっていた。一緒に作業をし、見よう見まねで覚えた。有機農業のイベントや配達にも一緒に連れて行ってもらい、有吉佐和子の家にも行った。そこで有機農業の人の輪、つながりを肌で感じた。	当時新規参入就農の例がなく、農地の情報も全くなかった。そんな中で、研修中の8月、「轍会」（小川町の後継者の会）に参加したところ、畑に手が回らなくなったという人が現れたので、畑3反（3筆）、田んぼ1反（2筆）を借り受けることになった。とてもラッキーなはいり方だが、それもやはり有機農業の人のつながりと言えるのではないか。	金子さんから学んだ最も大きいものは、行政との付き合い方。「ソフトに地道に粘り強く」と言う方法。この方法で徐々に行政に理解され、地域に浸透していった様を目の当たりにしたこと。農地の一時集積役になること。それをのれん分けして、研修生を独立させていく。地域の中でKファームは一定の地位と信用もあり、地目も分かるし、土地が集まってくるので、新規参入の支援をしたい。
K氏男	1985（23）	K農場	ずっと金子さんと一緒に作業をする。**「師弟同行」**。一通りすべてをこなした。 仕事の段取りは指示されるが、いわゆる農家の「常識」がないので、動きは見て覚えたが、その意味するところはさっぱり分からなかった。とにかく金子さんについていくだけだった。	畑1.5反、田圃1.5反で独立。前年に霜里農場の先輩(上記T氏)が新規参入の道を小川町で切り開いてくれていたので、後に続くことができた。 現在、金子さんとの付き合いは、有機農業というよりも同じ地区内なので、協同の仕事も多いし、役職も重なることも多い。そこでこの地域をどう発展させるか、ということを話し合うことが増えた。	「楽しむ」こと。この風土・景観の中で農業をする快感。食べものとエネルギー（特に3.11以降）のある安心感。そしてみんながやらないなら俺がやるという意気込み。さらに景観の創造=人を呼び込み、味方を増やす、という方向も推し進めたい。そのためにはネットではなく直接的な「つながり」を大切にしていきたい。
M氏女	1987（30）	M農場	他を「見る」ことから学ぶ。朝昼晩のご飯の時とお茶の時間に話をするが、いつも指導を受けたという記憶はない。当時住込みは一人だけ受入れていた。半住み込み、通いは人数制限もなく自由だった。	農業をメインの仕事にするのは、大変だと思うが、自給あるいは生活としての農業だから、とても楽しんでいる。この楽しさを若い主婦たちに理解してもらって、仲間を増やしていきたいのだが、なかなか現実には難しい。	日本の伝統的農業、小規模、なるべく機械を使わない手造りの農業を続けていきたい。

この結果，まず研修初期の 1980 年代は，金子氏が自家経営においてもまた研修内容・方法においても，模索を続けていたことが分かる．このことから，比較的年齢の近い経営主（金子氏は当時 30 歳代）と研修生のいわゆる「師弟同行」による切磋琢磨が，双方にとって農業技術や思想などに多大な影響を与え得るものと言えるのではないだろうか．同時に，研修後も地域の中で一緒に行動する仲間として存在し得たことが，通常困難であるとさ

れる新規参入・土地取得への道を開き，現在にもつながっていると考えられる．

次に，研修を経て独立した後は，それぞれの研修中に掴み取った基礎を元に，自給，家族経営，法人組織へと様々なルートへ展開していったものと考えられる．これらの中でも現在法人経営を展開するＴ氏は，自らも独立後２年で研修生を受け入れ始めた．当初は金子氏と同様の方法を取ったが，そもそも農家出身ではないので，提供する研修も試行錯誤を繰り返しつつ，直近 10 年くらいの間に研修のシステム化を図ってきたと言う．その理由は，当時提携の顧客が３～４年で離れていく状況が繰り返されたなかで，これを乗り越えるためには整備された研修と経営のシステムで臨んでいく必要を痛感したことにあった．このように，同じ地域に住む身近な手本と自分とを比べ，最終的な目標は「地域を守り，発展させる」といった同じところに置きつつも，自らが体験した研修方法を踏襲するだけではなく，それぞれ独自の方法を考案していたことは注目に値する．これこそが同じ地域に住む，農業生産者同士の切磋琢磨，「師弟同行」の成果，換言すれば現代の篤農家による青年農業者育成の強みと言い得るのではなかろうか.

４．結　　論

本研究で得られた結論は，次の３点に要約できる．

第１に，霜里農場における学びと研修の機会は，有機農業を目指す者のみならず，企業や教育機関にも開かれており，それぞれの研修目的や将来ビジョン，現在置かれている状況によって様々な関わり方が見られた.

第２に，「一粒万倍」掲載の 90 名の研修修了生の記述に基づき，インタービューを実施することにより，研修生は「つながり」（人と人，人と環境，人と野菜，等）の重要性を感じていたことが確認できた．特にこれらのことを象徴的に「有機的つながり」と捉えており，研修生は霜里農場での研修の生活や実体験を通じて金子夫妻の生き方の哲学に触れ, 人生観を揺るがすような研修を通して自らの生活をも変える決意を固めたものと見られた.

第３に，今回実施した修了生へのインタービューによって浮かび上がった霜里農場における研修の内容・方法とその成果は，比較的年齢の近い関係の中での「師弟同行」による切磋琢磨によって，直接・間接的を問わず研修生が独立した後も同志としてお互いに刺激し合える関係を築いていたものと見られた.

今後，1980 年代に研修した上記３名に対するインタービュー記録のクリーニングや再整理を進めるとともに，1990 年代，2000 年代，そして最近の研修修了生へのインタービューを重ね，金子氏による『未来をみつめる／命を守る農場』における農業者研修の全貌を解明したい．このことについては，今後の課題である.

引　用　文　献

稲泉博己（2006）「独立行政法人農業者大学校廃止と地域における農業教育の役割」，日本村落研究学会編『地域における教育と農』，年報-村落社会研究 42，101-139.

内山政照・菅英一・橘内孝一・金子美登・峰村正文・中尾雄二・影山正和（座談会）（1980）「営農・わが模索―卒業後の軌跡」，

金子美登（1986）『未来をみつめる農場―土と太陽のめぐみに生きる (社会・未来・わたしたち)』岩崎書店.

金子美登（1992）『いのちを守る農場から』家の光協会.

金子美登（1998）「日本の有機農業ステージを開拓してきた」，農林水産省農業者大学校・同窓会『農者大まるごと食べる本』，16-17.

金子美登（2011）「有機農業 40 年，霧里農場のチャレンジ」『日本農業普及学会誌』33 号.

塩見定美（2000）『青年農業者形成論』農林統計協会.

鈴村源太郎（2014）『農山漁村宿泊体験で子どもが変わる地域が変わる』農林統計協会.

（特活）アジア太平洋資料センター（PARC)，（2012）『有機農業で生きる-わたしたちの選択』（DVD）

農業者大学校第 1 期生の歩み編集世話人編『農をおいもとめて』，104-119.

藤田康樹（1997）『青年農業者の形成と支援』農山漁村文化協会.

藤田康樹（2011）『青年農業者育成論』全国青年農業者育成研究会.

レイヴ J・ウェンガーE 著／佐伯胖訳（1993）『状況に埋め込まれた学習――正統的周辺参加』産業図書.

付記）当初の申請グループは，稲泉・沖の 2 名であったが，調査研究遂行上さらに協力者が必要となったため，新たに 3 名を追加し現地調査並びに調査結果の分析を行った.